

主 題：神による裁き ② (ソドムとゴモラ)

聖書箇所：ルカ17：28-29

新約聖書ルカ17:28-30をお開きください。

先週から私たちは神様が下されたさばきについて学びをしています。きょうはルカ17章で主イエス・キリストがお話になった一つのさばきについて学んでまいります。

A. ソドムの罪

1. 「無関心」の罪 ルカ17:28節

28-29節をごらんください。「:28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、:29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。」、皆さんもよくご存じのさばきの話がここに記されています。なぜ彼らがさばかれたのか——。その理由を我々はここに見て取ることができます。まず28節で私たちが教えられることは、彼らの大きな罪の一つは無関心だということです。ちょうどノアの時代と同じように人々は幾ら神様の警告を聞いてもそれに関心を払おうとしない。自分のこととしてとらえることができず、他人事としてとらえてしまうわけです。神の警告に対して心を開かない人間の状態というのは、ノアの時もロトの時代も、もっと言えば今の時代も変わっていません。人々は周りを見て、何も起こっていないではないか、悪がはびこり、みんな好きなことをしているじゃないか。だから、今好きなことをして楽しんで、この地上での人生を全うすればいいのだと。だれひとりとして神様の警告に耳を傾けようとしなさい。そして悲しいことにノアの時もそうだったように、ロトの時も彼らが予期していない時に神様のさばきが彼らの上を下り、彼らは滅ぼされてしまった。

2. 「不義」の罪 創世記18:20-21節

もっと詳細な出来事が旧約聖書の中に記されています。その当時をのぞいてみたいと思います。創世記18章です。確かに彼らは神の警告に関して無関心でしたが、彼らの罪はそれだけではなかったということが明らかです。18:20-21には彼らが不義の罪を犯していたことが記されています。実はこの出来事は、18章の初めにアブラハムのもとに3人の人が訪れたという話の後に出て来ます。彼らがアブラハムとサラに対して「あなたは男の子を生むのだ」という約束を与えました。年老いていた彼らはその話を聞いても信じられませんでした。神が言われたことは必ずそのようになるのだと彼らは告げられるわけです。そしてその後この3人はソドムへ向かって行こうとするわけです。

* ソドムがさばかれた理由 ①

何のためにソドムへ行こうとしているのかが20節に「:20 そこで主は仰せられた。『ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。:21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおりに、彼らが実際に行っているかどうかを見よう。わたしは知りたいのだ。』」と、記されています。これはその当時の町の様子を表しています。ロトの家族を除いてほとんどの人たちが神に心を開いていませんでした。大変な罪を犯している者たちがいたわけです。その人たちの罪が余りにもひどいゆえに、多くの人々が嘆いていた。その嘆きの声が余りにも大きくて、神のもとに届いたと。もちろんそれがなくても神は何が行なわれているかご存じです。しかし、こうして擬人法をもって、神はその声を聞かれて、それに対して怒りを示しておられることを明らかにされ、ソドムとゴモラの罪は大変に重いと言われています。

この一連の出来事を見ると、アブラハム自身も彼らの罪は多少なりとも知っていたはず。というのも彼はこの主の使いと半ば取引のようなことをします。彼は「もし、ソドムに50人の正しい人がいたら、主よ、それでも彼らを滅ぼすのですか」と言うわけです。「いや、滅ぼすまい」と言われたら、アブラハムも不安になるわけです。45人だったらどうでしょうか、40人だったら、30人だったら、20人だったらどうですか？そして最後には「主よ、もし10人ならどうでしょうか？」という問いに対して主は「滅ぼすまい」と言われるわけですが、この町が滅ぼされたことを見るならば、この町にはたった10人の正しい人がいなかったということがわかります。大変な罪にあふれていたこのソドム。もう一カ所、創世記13:13に「ところが、ソドムの人々はよこしまな者で、主に対しては非常な罪人であった。」とその町の様子が記されています。ここから少しソドムのことがわかります。彼らは「よこしまな者」で、道理から外れていて、正しい行ないをしていなかったし、「非常な罪人」と書いてあります。このソドムの人々というのは主に対して非常に悪い、邪悪な者たちであったと。しかも普通の悪さではない、大変ひどい悪人たちであったと、このみことばが教えます。このような人々が住んでいたソドム。

もう少し細かく彼らの罪を見ていきましょう。19章を見ると、どんなにこの町が、人々がひどかったのかを見ることが出来ます。先ほどお話ししたように3人の者たちがアブラハムと出会いました。あなたたちには子どもが生まれるのだという話をした後で、アブラハムは主と取引をした。そして18:33で「主はアブラハムと語り終わられると、

去って行かれた。」と書いてあります。ですから、今までは3人だったのに19章になるとふたりの御使いに変わっています。驚くべきことは、この天使たちはあたかも人間のような姿で現れていたということです。そしてロトはその天使たちを自分の家に迎え入れることになるのですが、ぜひ見ていただきたいのは、その後19:4-5、「4 彼らが床につかないうちに」、まだこのふたりの旅人が眠りにつかないうちに、「町の者たち、ソドムの人々が、若い者から年寄りまで、すべての人が、町の隅々から来て、その家を取り囲んだ。:5 そしてロトに向かって叫んで言った。『今夜おまえのところにやって来た男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいのだ。』」と言うわけです。「彼らをよく知りたい」、これは性的な話です。みことばが私たちに教えてくれるのは、この人たちは同性愛者だったということです。この町にはそういう人々がたくさんいたということが見て取れます。確かに今の世の中は、そういった人々を半ば歓迎するような節があります。しかし、聖書を見た時に、そのような生き方はどこから見ても罪です。神の前に彼らは罪を犯しているのです。もちろん我々も救いをいただくまでは罪人ですけれども、こういった同性愛の罪は大きな罪です。

例:ローマ1:26-27

皆さんもよくご存じのようにローマ1章にもそのことが記されています。特に1:26-27に、「自然の用を不自然なものに代え」ということばが出て来ます。「自然な用」ということばが繰り返されているのですが、実はこれは新約聖書の中でここにしか出て来ないことばで、性的関係に用いられることばです。ですから、ローマ1章の中でも明らかに示されている人間の罪は何かというと同性愛の罪です。どんなに世の中がそれを受け入れようと、どんなに弁護をしようと、どんなに彼らのことを擁護しようと、聖書はそれが罪だと明確に教えています。そしてこのソドムの町にはこういう人々がたくさんいたのです。そして神様はこの町をさばかれたのです。

* ソドムがさばかれた理由 ②

確かにこの町がこういう罪を犯していたから神がこの町をさばいたのだと、そのとおりなのですが、実は聖書は非常に興味深いことを教えてくれます。ペテロはⅡペテロ2:6で「ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。」と言います。またユダ7では「また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。」、このソドムとゴモラ、またその周辺の町々も同じようなさばきを受けた。なぜかというと、彼らは「好色にふけり、不自然な肉欲を」求めたからです。性的な罪の話です。恐らくソドムだけではなくて周辺の町々にもこういった同性愛の人たちがたくさんいたのでしょう。そして神は彼らを、そしてその町を滅ぼされた。それは教訓のためだったのです。それを通してその後の人々が、神はこういう罪を憎み、その罪に対してさばきを警告されていることを覚えるためだということです。

ですからこのようにみことばが教え、またこういったさばきが現実起こったことを覚えるならば、我々はみずからの生活をしっかりと吟味することが必要です。我々自身、本当に神の前に喜ばれないものが存在していないかどうか、うちに潜む罪がないかどうかいつも吟味することです。感謝なことは主の前に行くなら、主はそれを赦してください。彼らは神がさばきを下すという警告を聞いてもいつまでたっても悔い改めようとしなかった。彼らがそれを悔い改めるならば、神はそこに赦しを与えてくださる。彼らはその赦しを彼ら自身の意思で拒み続け、さばきを自分の身に招いたわけです。そしてこのさばきというのは、後の人々にとっての教訓であるとみことばが言いました。

B. 教訓

1. ロト:「信仰的に幼い人」 四つの特徴

ですから私たちはこのソドムだけではなくて、このロトという人物について学びたいと思います。というのは、この人物を見ると、残念ですがそこに私たち自身を見たりします。どういう人物だったのか——一言でいえば、ロトという人物は信仰的に非常に幼い人でした。確かに神の恵みによって彼は救いに与っています。しかし彼は信仰的に非常に幼かった。今から四つのことを皆さんにお示します。

1) 「利己的な人」 創世記13:5-12

まず彼は非常に利己的な人物でした。

(1) 「人よりも自分を優先した」

なぜなら彼は人よりも自分を優先しています。ロトはおじのアブラハムとともにずっと旅を続けていました。そして彼らは豊かな祝福を神様からいただき、彼らの家畜は非常に多くなりました。そこで彼らはカナン——今のイスラエルです——に戻って来るわけです。その様子が13章の中に出て来ます。ところが、彼らの持っている家畜が余りにも多過ぎて、その土地の人々との間にいろいろと問題が生じて来ました。また、ロトの家畜を預かっている牧者たちとアブラハムの家畜を預かっている牧者たちの間にも争いが起きてきた。そこで、その当時アブラムと言われていたアブラハムはロトと一緒にいたら大変な問題になるから「もしあなたが右に行けば、私は左に行こう。」と言います。このカナンの土地にはカナン人とペリジ人が既に定住していました。この人々はカナンの中でも一番住みやすいところを占領していたわけです。後からやって来たアブラムたちは山地の方、食料においても水においてもどちらかというと恵まれていないところに住んだわけです。そうすると、水も食料も限られているか

ら、たとえおじとおいの関係であったとしても、親族であったとしても、自分の家畜の世話を考えている人たちはやっぱりそこに争いが生じてくるわけです。これはおれの水だ、この食物はおれが最初に見つけたのだと。そういう争いが生じたので、アブラハムはこのような提案をするわけです。余りにも家畜が多過ぎるので一緒に生活することができないと。この提案を受けて、ロトはおじの言われるまま自分の新しい居住地を選択するのです。我々だったら「まずおじさんが選択してよ」と言うところを彼は自分が選択します。その様子がこの中に記されています。自分が受けているこの祝福は、アブラハムを通して神様が祝して下さったということがわかっていたら、本来ならば、アブラハムにその選択権を渡すはずなのに、彼は自分からそれをしようとします。人よりもみずからを優先している姿をそこに見ることができます。

(2) 「自分の考えを優先した」 10-11節

同時に彼は自分の考えを優先しています。どこに住むかという話をされた時に、創世記13:10-11節を見ると、「:10 ロトが目を見てヨルダンの低地全体を見渡すと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる以前であったので、その地はツォアルのほうに至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。:11 それで、ロトはそのヨルダンの低地全体を選び取り、その後、東のほうに移動した。こうして彼らは互いに別れた。」と記されています。なぜロトがこの「ヨルダンの低地」を選択したのかというと、彼が見渡した時にそこが自分の一番理想とすべきところだったからです。自分が考える一番理想のところ、一番住みやすいところ、家畜を育てるのにベストと思えるところを彼は選択して、そこに移り住もうとするのです。

ごらんになってわかるように、ロトはそのために祈ってもいません。神のみこころを求めてもいません。彼の選択の基準となっていたのは、自分の思いと自分の目でした。新約聖書のⅠヨハネ2:16で「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」とヨハネは言っています。我々がこの目で見て欲しいと思うこと、エデンの園でもエバはその木の実を見た時に、大きな罪を犯してしまいました。大切なことは、確かにそう思えても、それが主のみこころなのかどうかを探ることです。ここにはそれを見て取ることはできません。彼は自分の考えを優先しています。

(3) 「妥協した」 12節

その結果何が起こったかということ、妥協が生まれるのです。12節に「アブラムはカナンに地に住んだが、ロトは低地の町々に住んで、ソドムの近くまで天幕を張った。」と書いてあります。「ソドムの近くまで天幕を張った」ということはその近くまで彼は出かけて行ったということです。その次の13節を見ると、「ところが、ソドムの人々はよこしまな者で、主に対しては非常な罪人であった。」とあります。最初、ロトはソドムがどんな町であったかを知らなかったとしましょう。でも実際そこに行ってみたら、どんな町かすぐにわかるではないですか。不思議なのはなぜ彼がその町から出なかったか、彼はなぜそこに移り住むのかです。間違った選択をすると、妥協に妥協を重ねて行きます。悲しいことに彼はこのソドムという町に腰を下ろすわけです。ロトという人物はアブラハムよりも自分の考えに基づいて、このように大変な罪を犯しているその町を嫌って離れるのではなくて、逆にその町に住むといった選択をした人です。

2) 「知恵に欠けている人」 19:4-8

二つ目に彼の特徴として挙げられることは、創世記19:6-8です。先ほどの話を思い出してください。ソドムの町にこのふたりの御使いが訪れた時に、ロトが出迎えました。ロトは自分の家にこのふたりを招いて歓迎します。そうすると、このふたりの者が休む前にロトの家は町の人々によって包囲されました。その時に彼が何をしたのかというのが、この6節に書いてあります。「:6 ロトは戸口にいる彼らのところに出て、うしろの戸をしめた。」、彼はその人々に向き合うわけです。「:7 そして言った、『兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでください。:8 お願いですから。私にはまだ男を知らない二人の娘があります。娘たちをみなの前に連れて来ますから、あなたがたの好きなようにしてください。ただ、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは私の屋根の下に身を寄せたのですから。』」と。確かにこの当時、自分の家を訪れた客をもてなすことは重要でした。でも彼が選択した行為というのは、どこから見ても罪です。その当時の文化や習慣からしても客人をもてなすことは確かに大切ですが、彼はその客人のために自分の愛する娘たち、神から託された娘たちを犠牲にしようとするのです。ロトはここで、自分の娘たちを客人にかわって犠牲にしてもらっても構わないという大変な選択をしています。何が神の前に正しいことなのか、その選択ができていない。神様はそんなふうにして私たちに大切な子どもたちを託されているのではない。彼らは守るべきものです。ところが、逆にその娘たちを神に逆らう者たちの餌食にするようなことを彼は選択するのです。明らかに知恵に欠けています。

3) 「不信仰な人」 19:13-38

三つ目に言えることは、非常に不信仰な人物です。どうしてそれがわかるか——。この話の続きを見てください。今度はこのふたりの御使いたちがロトを助けるわけです。12節でさばきが訪れるということをロトに告げます。特に13節「わたしたちはこの場所を滅ぼそうとしているからです。彼らに対する叫びが主の前で大きくなったので、主はこの町を滅ぼすために、わたしたちを遣わされたのです。」と告げました。

(1) 「ためらっていた」 16節

そういったさばきのメッセージを聞いたロトはどんな反応をしたのか——。15節「夜が明けるころ、御使いたちはロトを促して言った。『さあ立あなたの妻と、ここにいるふたりの娘たちを連れて行きなさい。さもないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまおう。』」、彼の不信仰さを表すことばが次の16節の初めに出て来ます。「しかし彼はためらっていた。」と。神のさばきが下ると言っているのに、彼はためらうのです。このことばの意味は「立ち去りかねる」とか「ぐずぐずしている」ということです。今すぐ立ちなさいと言っているのに、なかなかそこを立って、言われるように町を逃れることをしようとしていなかった。

(2) 「主よ。どうか、そんなことになりませんように。」 18節

18節でロトは彼らに「『主よ。どうか、そんなことになりませんように。』」と言うのです。なぜかという、御使いは「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない。この低地のどこでも立ち止まってはならない。山に逃げなさい。さもないと滅ぼされてしまう。」と言ったからです。そのような神の警告を聞いた時にそんなことはありませんようにと。そして、その後、ロトは御使いにお願いするわけです。そんな山に逃げるなんて、遠すぎて無理です。あそこに小さな村があります、あそこに逃げることを許してくださいと。御使いは構わないと言うのです。そしてそこに逃げた途端、ソドムは滅ぼされてしまいました。その町の名前が「ツォアル」と書かれています。23節「太陽が地上に上ったころ、ロトはツォアルに着いた。」と。「小さい町」ということですが、その町に着いたのです。

(3) 「恐れた」 30節

その後、30節「その後、ロトはツォアルを出て、ふたりの娘といっしょに山に住んだ。彼はツォアルに住むのを恐れたからである。」とあります。こうして見ると、ロトという人物がどういう人物だったかがわかってきます。彼は神様からこの御使いを通して、さばきが下るから今すぐここを出なさいと言われてもためらっていませんでした。その命令に従ってすぐに行動しませんでした。これからさばきが下るから山に向かって逃げなさいと言われた時に、いやそんなことはありませんようにと。そして実際に彼が望んだように「ツォアル」の町に逃げた時にさばきは下りました。助かったのです。でも今度彼はそこから山の方へと出て行きます。なぜかという恐れたのです。またこの町が滅ぼされてしまうのではないかと、きっと彼はそう思ったのでしょう。これまで私たちが見て来た信仰の勇者とは違います。神が仰せられた時に、彼らは即座にそれに従って行動したとか、神が言われたことを信じてその信仰に基づいて行動したとか、たとえ恐れることがあったとしても彼らは神を信じ続けたとか、そういった信仰の勇者たちとは違ってロトはこのような選択をし、このような歩みをしていたのです。

4) 「家庭を治めていなかった人」 19:14

もう一つこのロトについて言えることは、彼は家庭を治めていなかったのです。

(1) 娘たちの婚約者たちの反応 14節

創世記19:14「そこでロトは出て行き、娘たちをめぐった婿たちに告げて言った。『立ってこの場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。』しかし、彼の婿たちには、それは冗談のように思われた。」とあります。ロトは自分の娘の婿たちにと記されていますけれども、まだ彼らは結婚していません。なぜかという、19:8に「私にはまだ男を知らない二人の娘があります。」と書いてあります。ですから婚約状態にあったということが見て取れます。その娘の婚約者ふたりに対して、神様がさばきを下すからここから逃げなさいと言った時に、彼らは「冗談でしょう？」と全く信用がなかったのです。言っている内容というのは重たいではないですか。さばきが来るという話です。それを聞いてもこのふたりは冗談を言っているとか思わなかった。ロトは彼らに対してどんな影響力を持っていたのでしょうか。非常に悲しい現実です。彼らは彼の言うことを信じなかったのです。

(2) 彼の妻の反応 26節

二つ目は26節の彼の妻の反応です。「ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった。」とあります。実はこの彼女の歩みが表しているかことは、実は彼女は神に対して不信仰だったということです。さっきも見たように、17節で御使いは神様のメッセージを伝えます。「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない。」、これが命令なのです。ところが彼女は、その命令に従わず後ろを振り返るのです。我々はここで非常に悲しいことを見るのですけれども、それもそのはず夫であったロトが不信仰な人物だったからです。わずかな箇所ですけれども、今見て来たように彼自身が神様の言われたことをそのまま受け入れていない。彼の妻も、たとえ神様がそう言われたとしてもそれを徹底して守る必要があるとは思っていないのです。

ある神学者たちは、彼女がソドムの町を振り返ったのは、彼女自身がソドムの出身者だったのではないかと言います。ロトがソドムに移り住んだ時、結婚していると記されていません。その出身だから、その町に対する、そこでの生活に対する愛着があったのではないかと。いずれにしろ、彼の妻もロトに見られるように、非常に不信仰な姿を見ることが出来ます。

(3) 彼の娘たち 30-38節

そして三番目に彼の娘たちを見てください。19:30から非常に悲しい話が出て来ます。このふたりの娘たちのいいなずけも町の人々と同じように滅ぼされてしまいました。そして残ったのは、ロトと娘たち三人だけでした。その様子が30節から出て来ます。彼らはほら穴の中で生活をしていたと記されています。そのうちに姉は妹にこう言うのです。「お父さんは年をとっています。この地には、この世のならわしのよう、私たちのところに来る男の人などい

ません。さあ、お父さんに酒を飲ませ、いっしょに寝て、お父さんによって子孫を残しましょう。」と、このような罪が行なわれたわけです。この娘たちも実はその親と同じように不信仰でした。我々のいいなずけは死んで、この山の中では若い男性に会う可能性がない。だから私たちが子どもをもうけようとするならば、お父さんしかいないと言って、神の道に反した選択を彼らは取ります。彼らの問題は、神は常に最善を満たしてくださる、与えてくださるという約束を信じて、なぜ神に信頼を置かなかったのかです。彼らは自分たちで問題を解決しようとするのです。だから不信仰なのです。しかも彼らはこういった大変大きな罪を躊躇なく選択しています。自分の父親によって子どもをもうけることが神の前で最善の選択と思えた。当然そこには神様の祝福はありません。その様子が19章の最後に出て来ます。ふたりとも父によってみごもったことが記されています。「姉は男の子を産んで、その子をモアブと名づけた。」と、「妹もまた、男の子を産んで、その子をベン・アミと名づけた。」と。それぞれモアブ人、アモン人の先祖であり、これらはすべて神が選ばれ愛されたイスラエルの敵です。こういった罪が、こういった大変な悲しい結果をもたらしたのです。ロトの子孫が、神が選ばれたイスラエルの敵となったのです。

こうして見ると、父親であったロトは大切な責任を果たしていなかった。自分の家庭を正しく治めていませんでした。みことばはこう言います。「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」と箴言22:6です。我々親の責任はしっかり子どもたちを教え、子どもたちが大きくなっても、神の教えから離れることがないようにしっかり訓練して行きなさい。残念ながらロトはそれをしていなかった。

ロトの悪い部分ばかり見て来ました。しかし驚くべきことは、神はこのようなロトを救いへと招かれたということでした。みことばは教訓だと言いました。ということは、私たちがしっかりと覚えなければいけないのは、我々も罪深さを見るならば、まさにロトに勝った者です。しかし、神は私たちをそうして救ってくださった。救われた者としてそれで終わりではないのです。ロトは悲しいことに信仰的に非常に幼かった。我々神の恵みによって救われた者がいつまでもたっても信仰的に幼い状態であってはならないのです。我々神によって救われた者たちは、神によって成長しなければならぬということです。少なくとも我々はこのロトの失敗を通してそのことを学ぶことです。

2. パリサイ人：「不信の罪(頑なな罪)」 ルカ17:20-21

1) 地上における神の国と霊的な王国

そして最後にきょうのテキスト、ルカ17章に戻ってください。前回と今回、私たちはノアの洪水の話とソドムに起こった神様のさばきの話を見てきました。私たちが考えなければいけないのは、なぜイエス様はこのような話をされたかです。この文脈を我々は見る必要があります。

ルカ17:20に「神の国はいつ来るのか」とパリサイ人たちにイエス様が尋ねられている様子が記されています。そしてそのイエス様のお答えの中に、今我々が見て来たノアやロトのこと、ソドムの話が出てきたわけです。イエス様は実はパリサイ人たちにあることを教えようとして、このさばきを引き合いに出されたのです。パリサイ人たちはイエス様のもとにやって来て、「神の国はいつ来るのか」と質問しました。でも彼らは大変な間違いをしでかしていたのです。彼らの考える神の国というのは、自分たちをローマから解放してくれて、そして建てられるものと思っていました。イエス様はそうではないと彼らに教えようとなさるわけです。確かに神の国がこの地上に訪れることをイエス様は否定しているのではありません。必ずそれは後に訪れます。しかし、イエス様は20節、「イエスは答えて言われた。『神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。』」と言われた。パリサイ人たちはこの話を聞いて、イエス様は何を言わんとしているのかと非常に混乱したでしょう。彼らの考えたのは、地上に確立される王国です。イエス様は心のお話をされたのです。彼らは実際にこの地上に建てられる王国を話していたのです。イエス様は心の中の霊的な話、つまり救いの話をされたのです。彼らの言っているのは、ローマからの救いの話です。イエス様が言っているのは罪からの救いの話です。そのためにイエス様は来てくださったのです。このパリサイ人たちの大きな問題は、イエス・キリストと話をしながら、イエス・キリストを見ていながら、それでいてイエスが神の御子であることを信じていませんでした。イエス様が教えようとしたことは、イエス・キリストは罪人の罪を赦し、その人たちを新しく生まれ変わらせ、まさにそれぞれの心に神の国を確立してくださるということだったのです。なぜならイエス様をお信じになった皆さんは、王であるイエス・キリストに従っておられますでしょうか？その王を愛して、その王の喜ばれることを選択しようとしておられるではないですか？確かに私たちは地上にまだその王国を見ていません。でもその王国は私たちの心のうちにあります。我々はその王に仕えるしもべとして生きています。イエス様はそのことをお話になっているのに、パリサイ人たちはそんなことを聞こうとしません。彼らが考えていたことは自分の理想の地上における王国です。

2) 不信の罪と頑なな罪

そこでイエス様は彼らの過ちを明らかにされ、彼らの罪を指摘されるのです。それは、聞いてはいるけれども、信じようとしない不信の罪です。彼らは主イエス・キリストに実際に出会っていないながら、その頑なな心をいつまでもたっても開こうとしない頑なな罪です。イエス様はそのことをご指摘になって、その罪を責めておられるのです。彼らは神の真理に従おうとはしませんでした。彼らは自分勝手な考えや自分勝手な教えを信じて歩んでいたのです。主はその間違った歩みに警告を寄せられたのです。あなたたちの生き方は間違っていると。そしてそのよ

うに神の真理に従うのではなくて、自分たちの考えに従い続けるならば、あのノアの時代がそうだったように、あのソドムがそうだったように、その当時の人々と同じようにあなたたちの上には神のさばきが下るのだと警告されているのです。ですからイエス様はこうしてこの人々に対して、神の真理にしっかりと立ち、罪を悔い改めなさいと。そして神の警告されているさばきに対する備えをなしなさいとお教えになったのです。

私たちは耳を傾けなければなりません。もしこの中でまだイエス様の救いをお信じになっておられない方がおられるなら、神様はあわれみをもってあなたにそのメッセージを伝え続けてくださっています。神を拒んでおられるのはあなたです。神はあなたを拒んでおられないのです。でも神があなたを拒む日はやって来ます。それはあなたが神を拒み続けたからです。そこにあるのは永遠のさばきでしかないことを私たちは学んで来ました。でも感謝なことに、ノアの時代もロトの時代も神様はそこにまだ救いの道を備えてくださっている。その証拠が皆さんにきょうという日が与えられていることです。神はあなたが神に逆らっていることを知っておられる。その上であなたに悔い改めの機会を下さっている。罪を悔い改めてこの備えられたイエス様を信じ、この救いをいただくことです。そうすることによってあなたはこの神のさばきに対する備えができます。そのことを主はこのパリサイ人たちにお教えになった。

ノアの箱舟もソドムとゴモラに対するさばきも実際に起こりました。この世には今もその証拠があふれています。私たちはしっかりと目を覚まさないといけないのです。神のさばきが近づいている今、信仰者であるあなたはそれにしっかりと耳を開いて、その警告にしっかりと目を見開いて備えをなすことです。まだこの救いをお受けになっておられなければ、きょうが救いの日です。どうぞ救い主を心から信じてこの救いに与っていただきたいと心からお勧めします。

《考えましょう》

1. ソドムに住む人々が犯していた罪について説明してください。
2. ロトの信仰からあなたが教えられたことは何でしたか？
3. どうして「主のみこころ」ではなく、自分の考えで生きることが間違っているのでしょうか。
4. どうして「みこころ」に従うことが難しいのでしょうか。そのことを難しくしているのは何だと思いますか？